

鴻池家寄贈染織文化財の概要

十四代鴻池善右衛門氏によって鴻池家伝来の文化財が大阪市を含む三都市の博物館施設に寄贈されたことは、【共同研究の目的と概要—1. 共同研究の背景ならびに目的】ですでに述べたとおりである。大阪歴史博物館では、鴻池家からの寄贈を記念し、特別展「豪商鴻池—その暮らしと文化—」展（平成15年3月12日～5月5日）ならびに、特別展「華やぎの装い—鴻池コレクション展—」（平成22年6月2日～7月26日）を開催、館蔵資料集「鴻池コレクション」（平成22年7月）を刊行するなど、鴻池家寄贈の文化財の活用に努めており、同家伝来の染織文化財についても、これらの展覧会においてその一部を紹介している。

鴻池家伝来の染織文化財のうち、大阪で受贈した資料群は、（1）服飾品と（2）その他の染織品（＝寄贈裂類）に大別される。本稿の便宜のために大別分類を再掲しておく。

- 染織文化財
- （1）服飾類
 - ①男性物—上下類、小袖類（熨斗目、羽織類）洋装関係品
 - ②女性物—小袖類（振袖、小袖）
 - （2）その他の染織品（＝寄贈裂類）
 - ①茶の湯関係裂（仕覆解袋など）
 - ②反物（おもに輸入裂）
 - ③袱紗・服地の端切れなど

【（1）服飾品】の特徴としては、男性物と女性物の双方を含むこと、点数としては男性物の儀礼服である上下および袴が圧倒的に多く、上下51具、肩衣22枚、袴7腰を数えることができる。さらにいえば、上下類には鴻池家の家紋である「五ツ山」のほか、出入り先の家々の家紋を付けた上下類が多数含まれる点も鴻池家寄贈品の特徴のひとつである。上下類のほかに熨斗目4領および羽織及び道服16枚、袴纏、腹掛、旅行用品、明治から昭和初期までに使用されたと考えられる洋装品など多岐にわたっている。他方、女性物としては、高価な生地を手間をかけて加飾された豪華な小袖類が多く、計30領を寄贈されている。帯やその他の小物類、頭飾具は含まれていない。なお、鴻池家伝来の小袖のうち3領は、大正2年（1913）夏に天王寺公園で開催された関西教育博覧会に出品されており、大阪においては早くからその存在は知られていた。

寄贈の際の十四代善右衛門氏よりの聞き取りによると、これらの服飾品の大半は当主および当主の家族が着用したと考えられ、昭和22年（1947）に今橋本邸を大阪美術倶楽部へ売却するに際して今橋本邸の蔵から運び出されたものであったとのことである。服飾品の年代は、年記を持つ最も古いものが安永六年（1777）年銘の山中善次郎（のちの七代善右衛門幸栄）所用の素襖袴である。当該作品以外の服飾品については年記は確認できないものの、その多くが江戸時代後期に調製された服飾品であろうと考えられる。

続いて本研究の対象資料群である【（2）その他の染織品（＝寄贈裂類）】についての概要を述べる。本資料群は、おもに【①茶の湯関係裂（仕覆解袋など）】と【②反物（おもに輸入裂）】と【③

袱紗・服地の端切れなど】によって構成される。

【①茶の湯関係裂（仕覆解袋など）】は、いわゆる名物裂として茶人たちの収集対象ともなり得る裂である。しかし、このカテゴリに含まれる裂の数量は非常に少ない。じつは昭和戦前期においては、鴻池家には名物裂および裂箆筒などが複数伝来しており、これらは昭和7年（1932）11月の昭和天皇の大阪行幸に際して天覧に供され、同家においては「家宝」の扱いを受けるなどよく知られたコレクションであった。しかし現在では、これらはすべて鴻池家を離れており、2018年に刊行された『名物裂の研究 鴻池家伝来の仕覆解袋』（小笠原小枝編著）において紹介される鴻池家伝来裂箆筒の収納裂がこの「家宝」の裂の一部にあたることは同書において報告したとおりである。鴻池家には「家宝」の裂箆筒のほかに複数の裂が蒐集されていた記録が残っており、その内容の再検討は今後の課題のひとつとして挙げておく。

続いて【②反物（おもに輸入裂）】であるがこちらが寄贈裂類の中核を占めるものである。裂の多くは反物で、木軸に堅く巻き締められて伝来した。また大多数は中国大陸からの輸入裂であり、入手時期等を書き付けた付箋や反物から裂を切り取る際に付された付箋なども残る。付箋は反物の利用状況を知る手がかりとなっている。さらに、この一群には、中国清朝の官営工房で織製された裂地（No.143 薄紅地梅笹蝶文金入錦）や、本来は中国においては官服に仕立てられる裂地（No.140 あひみる茶大紋丸龍緞子）なども含まれており、鴻池家の裂類蒐集の広範さを知ることができる。

【③袱紗・服地の端切れなど】には、小袖を引き解いた端切れなどのほか、十一代善右衛門幸方やその妻女であった路子（三井室町家より入嫁）の使用が伺われる袱紗7点も含まれている。また明治期以降に機械織の服地、ヨーロッパ製と考えられる生地、仏具などの調度品に使用した裂地などの残りかと思える生地なども多数含まれる。なかには用途は不明であるもののインドで製作されたと思える青色の生地に色鮮やかな架空の花が咲き誇る様子を描いた裂地（No.102 青地描絵花模様装飾布）も認められた。

以上のカテゴリに大別される鴻池伝来裂類の明細は本報告書20頁から29頁にリストで掲載した。また、そのうち13点を選び、巻頭のカラー頁ならびに31頁から36頁に調査写真を掲載した。なお、巻頭のカラー頁に掲載した二作品（No.143, No.140）を含む清朝で織製された染織品については、佐藤留実氏が「鴻池家コレクションにみる清朝官営工房の染織」（30ページ）で報告しているので参照いただきたい。

（中野朋子）